

## イアン・マキューアンのスパイ小説 Sweet Tooth : 読者は小説に何を求めるのか?

著者名(日)	武藤 哲郎
雑誌名	大妻女子大学紀要. 文系
巻	45
ページ	236-225
発行年	2013-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1114/00005720/">http://id.nii.ac.jp/1114/00005720/</a>



# イアン・マキューアンのスパイ小説 *Sweet Tooth*

— 読者は小説に何を求めるのか? —

武藤哲郎

## はじめに

イアン・マキューアン (Ian McEwan) の *Sweet Tooth* は 2012 年 8 月に出版されたばかりの、短編小説を含めて彼の 15 番目の小説になる。主人公はイギリスの諜報機関 MI 5 に配属された若くて美しいセリーナ・フルーム (Serena Frome) で、小説の中ではコードネーム 'Sweet Tooth' という極秘任務に就く。よって、この小説は基本的には「スパイ小説」である。ところが、小説の中でトム・ヘイリー (Tom Haley) の書いた小説が披露され、セリーナの小説論も加わって小説について考える小説、「メタフィクション (metafiction)」の色彩も強い。さらに、小説にはマキューアンの旧友たち、マーティン・エイミス (Martin Amis), イアン・ハミルトン (Ian Hamilton), そしてトム・マシュラー (Tom Maschler) が「カメオ出演」して「自伝的小説」の趣もある。また、小説には実際の歴史的人物、元 KGB のスパイ、オレグ・リアリン (Oleg Lyalin) が登場して「歴史・政治小説」の様相も否定できない。最後に、小説の結末がセリーナを愛した二人の「スパイ」、トニー・カニング (Tony Canning) とトム・ヘイリーからの恋文で終わっていることを考えると、「恋愛小説」になっていると強く感じる読者も多い。

このようにマキューアンの最新小説 *Sweet Tooth* は、スパイ小説、メタフィクション、自伝的小説、歴史・政治小説、そして恋愛小説の要素を合わせ持っているのである。必然的に読者はマキューアンの意図がどこにあるのか疑問に思う。いったいマキューアンは何を一番書きたかったのか。批評家たちの意見もこの多面性を評価するかないかによって、賛否両論に分かれる。しかし、発想を転換して、もしあのいたずら好きのマキューアンが読者に反対に「あなたは小説に何を求めますか？」と問いかけているのだとしたら私たちはどう答えるのだろうか。*Sweet Tooth* において私たちは何を一番望むのだろうか。

## 1. スパイ小説

セリーナ・フルームは英国国教会主教の娘として育ち、グラマー・スクールでは「本の虫」となって暇さえあれば小説を読みあさっていた。将来は地元の大学で英文学を専攻するつもりでいた。しかし、時折示した天才的な数学の才能に気付いた「フェミニストの原型」である母親は、英文学を専攻して人生を無駄にすることは許さないと行って彼女をケンブリッジ大学へ行かせ数学を専攻させるのである。秀才ぞろいの学生の中で彼女は最初苦労するが結果的には三番目の成績で大学を卒業する。ケンブリッジ大学で小説を読むのをやめた訳ではなかった。学生サークルの機関誌のコラム ('What I Read Last Week') の執筆も手がけるようになり、それなりに人々の評価を得るよう

になった。彼女はアレクサンドル・ソルジェニーツィン（Aleksandr Solzhenitsyn）に傾倒し反共産主義的論説をコラムに書き始めるようになる。このような時期にセリーナはボーイフレンドのジェレミー・モットー（Jeremy Motto）を通して歴史学の教授トニー・カンニングと知り合うのである。トニーは、第二次大戦中イギリスのスパイとしてヨーロッパで反ナチ運動を繰り広げるレジスタンたちを手助けしていた経歴がある。彼は、セリーナが反共産主義に傾倒しているのを知り、厳格な保守的環境で育ったことも調べ上げ、彼女をイギリス諜報機関である MI5 に引き入れようと内心考えていたのである。ジェレミーがケンブリッジ大学を去った時期を境に、セリーナとトニーとの新しい関係が始まった。1972 年夏のほんの数ヶ月の燃えるような恋であったが、セリーナにとって生涯忘れられない夏の思い出となった。彼女は 21 歳、トニーは 54 歳である。最終試験が終わって彼らは、町の外れにあるトニーの別荘小屋に週末人目を忍んで出かけるようになる。楽しかった夏の思い出の一部をセリーナは次のように語っている。

It was a thrill to step out of the bus queue, resentfully observed by ordinary passengers, while I turned from frog to princess and stooped to crawl in beside the professor. It was getting into bed, in public. I shoved my bag into the tiny space behind me, and felt the seat's cracked leather snag faintly against the silk of my blouse — one he had bought me in Liberty's — as I leaned across to receive my kiss.<sup>(1)</sup>

トニーの別荘小屋に出かけるにはケンブリッジ大学の知った人々の目があるので、セリーナはこのように途中のバス停でトニーのスポーツカーを待つのが常だった。彼の車がバス停に着くと、バスを待つ人々の怒りの目を尻目にセリーナは列の中から飛び出して彼の車に飛び乗るのである。「蛙からお姫様になって」という表現にセリーナの幸福感が垣間見られる。さらに彼女はトニーから絹のブラウスを買ってもらっている。

この絹のブラウスが彼らの別れの「布石」となっていることをセリーナはまだ知らない。恍惚感に酔うセリーナの知らないところで過酷なスパイ活動は続けられているのである。別荘小屋で彼らは散歩や読書、あるいは音楽を聴いたり料理を作ったりして楽しく過ごす。トニーはセリーナに歴史、特にヨーロッパやイギリスの歴史をまるで大学のチュートリアルのように厳しく教え込む。全てが MI5 に入るための準備であった。短い夏が終わろうとしているとき、黒塗りのセダンが別荘小屋の前で止まり、二人の男が出て来てトニーと話し始める。彼はセリーナに「長い」散歩に行くよう半ば命令口調で伝える。小説の後半で判明することだが、トニーが「二重スパイ」であることがイギリス側に知られて、彼が MI5 から尋問を受けることになったのである。

新学期が始まって、ケンブリッジに帰る際、トニーはセリーナの絹のブラウスを彼の洗濯籠に入れておくように言う。トニーの奥さんはまだ別荘にやって来る時期ではないし、それまで掃除のおばさんが洗濯を終わらせてくれるだろうとそれ以上は深く考えないで彼の指示に従った。しかし、ケンブリッジ大学での授業が始まってしばらくたってもトニーからの連絡がない。カレッジの事務室にメモを残すが、なお連絡がなく、セリーナが不安に成り始めたときに、トニーから電話があっけいつものバス停で待つようにとの指示があった。二人が乗った車は高速道路の一時駐車場に止まり、それまで黙っていたトニーはセリーナに「君のトリックはうまくいかなかった」と突然怒って話出した。セリーナは最初訳が分からなかったが、彼女の洗濯籠に残した絹のブラウスをトニーの妻のフリーダ（Frieda）が見つけた彼らは 20 数年ぶりに激しい夫婦喧嘩をしたそうである。トニーはわざとセリーナがブラウスを洗濯籠に入れ彼ら夫婦を離婚させて、晴れてトニーと一緒に成る算

段を企てたのだろうと言う。しかし、洗濯籠にブラウスを入れるようにいったのはトニーの方だったとセリーナが言っても、彼はそんなこと言うはずがないと子供をなだめるように優しく言い返してくる。彼女をひとり一時駐車場に残して車で立ち去ろうとするトニーに向かって、セリーナは次のように叫ぶ。

I called stupidly through the car's canvas top, 'Tony, stop pretending that you don't know the truth.'

How ridiculous. Of course he wasn't pretending. That was precisely his failure. He gunned the engine a couple of times in case there was anything else I wanted to say that needed drowning out. Then he pulled forward — slowly at first, concerned perhaps that I would throw myself over the windscreen or under the wheels. But I stood there like a tragic fool and I watched him go. I saw his brake lights come on as he slowed to join the traffic. Then he was gone, and it was over.<sup>(2)</sup>

呆然とたたずむセリーナをひとり残して、トニーの車のテールランプは高速道路の流れの中へと消えていく。これが彼女がトニーを目にした最後となる。トニーがブラウスを洗濯籠に入れるように言ったか、言わなかったかはもうセリーナにとっては重要ではなかった。彼女は明らかにトニーに捨てられたのである。あの短い夏の燃えるような恋は終わったと諦めるしかなかった。トニーから再三言われたスパイの鉄則「誰も信じてはいけない」を彼女は自ら体験することになる。ところが、この出来事の裏には計り知れない大きな、西側そして東側諸国を巻き込むスパイ合戦があったことをセリーナはまだ知らない。

トニーに捨てられたにもかかわらず、セリーナはMI5の面接を受けて合格し、最初は資料整理やタイピングなどの事務処理をするようになった。同じ時期に入った同僚シャーリー・シリング (Shirley Shilling) と親しくなり、仕事が終わった夜などは下宿屋の近所のパブに一緒に出かけた。いくら親しくなっても同僚の仕事の内容を聞くことはMI5では固く禁じられていて、シャーリーがどんな仕事をしているのかセリーナには分からなかった。そのような時期、年があらたまった1973年にエディンバラ大学に行ったジェレミーから手紙を受け取る。2月の『タイムズ』の死亡記事にトニー・カニングの名前が載っていたというのである。ケンブリッジ大学の友人からの情報では、トニーは末期癌にかかっていた1972年9月にケンブリッジ大学に辞表を出し、妻とも離婚をし、ひとりで自分の最後を迎えようとバルト海にある小さな島クムリング (Kumlinge) へ行ったということであった。セリーナがトニーと別れてからすぐの出来事である。彼の死を知るまで、彼女はトニーを本当に愛していたのか疑問であった。ところが、この手紙を受け取ったとき初めてセリーナは心から彼を愛していたこと気づき、地下鉄の中で思わず涙を流す。

セリーナが仕事をしている部屋にはマキシミアン・グレイトレックス (Maximilian Grotorex) という一風変わった30歳くらいの男がいた。教育熱心で過保護な家庭で育った坊ちゃんタイプの男である。ジェレミーにどこか雰囲気似ているので誘いをかけても、あまり女性には興味がないようである。何回目かのデートのときマックスが突然、「トニーが行った島の名前を憶えているかい」と聞いてきた。彼女は忘れていたので、その話はそこで終わったが、次に会ったとき、マックスはまた出し抜けて「クムリングではなかったか」と尋ねてきた。セリーナは思い出してそうだと答え、どうして知っているのかと彼に聞くとただ、「美しい島だと聞いたから」と言うだけだった。次のデートでは、同じようにそのときまで話してきた内容は無視して急にマックスは、

「オレグ・リアリンは勿論知っているよね」と聞くのである。オレグ・リアリン (Oleg Lyalin) とはイギリスに亡命したロシア KGB のスパイのことである。このとき彼女はマックスが突然見知らぬ男のように感じ、彼の大きな耳がまるでレーダーのように彼女の小さなささやき声でも聞き逃すまいと彼女に向けられている気がした。彼が何を聞き出したいのかセリーナには皆目検討がつかなかった。そして彼はさらに、「トニーは君にリアリンのことは話さなかったか」と聞くのである。マックスが執拗にトニーのことを聞くのは、彼が二重スパイであったことからどれくらい重要な情報をどれくらいの量彼が知っていたかを探るためであり、またどの程度それをセリーナに漏らしていたのかも知るためであった。トニーが死んだ今でも MI5 にとっては是非とも確認しておかなければならない、諜報機関にとっては死活問題であった。マックスは別れ際、「Sweet Tooth」という面白い計画がある。君を推薦しておくよ」という謎めいた言葉を残す。これは、ある程度セリーナがトニーから情報を得ていないことを確認したからでもあり、もう少し MI5 に引き止めて様子を見ようとする両方の目的があった。

この後、立て続けにセリーナの身にまるでジョン・ル・カレ (John le Carré) のスパイ小説を思わせるような不気味で奇妙な事件が起きる。一つはセリーナの下宿に誰かが入った形跡があることだった。それまで彼女は誰かに尾行されている気がしていた。しかし、ある夜下宿に帰ってみると同居している 3 人の女の子はいずれも故郷に帰って、明かりがついていなくフラット全体が真っ暗であった。自分の部屋に入ってみると、昨夜本に差したはずのトニーからもらった革製の枝折 (しおり) が何故か椅子の上に置かれている。

I reached out and pushed down the Bakelite switch and saw immediately that the room was undisturbed. Or so I thought. I stepped in, put down my bag. The book I'd been reading the night before — *Eating People is Wrong*, by Malcolm Bradbury — was in its proper position, on the floor by the chair. But the bookmark was lying on the seat of my armchair. And no one had been in the house since I'd left that morning.<sup>(3)</sup>

彼女の部屋には鍵がかからないので、その夜はドアにタンスを立てかけ、部屋のライトは付けっぱなしにして、彼女は眠られぬ夜を過ごす。

二つ目と三つ目の事件は、セリーナとシャーリングが MI5 が諜報活動に使っていた秘密の家の掃除に狩り出されたときに起きる。掃除の合間にシャーリングは東ドイツに滞在していた思い出を語り、そこでは人々が互いのことを気にかけていて ('People cared about each other'), イギリスよりも良いと言う。セリーナは、根っから共産主義が嫌いなので、ここイギリスでも人々は互いのことを気にかけていると反論する。「ではどうして、西側と東側でいがみ合っているの?」という問いに「東側は偏執的な一党政治で、報道の自由もないし、人々の旅行の自由もないわ」とセリーナは答える。シャーリングは「ここイギリスでも一党政治体制で、報道は茶番で、貧しい人々は旅行に行けないでしょう」と言い返す。ここまでくると議論というよりは口論になって、「中産階級の人々には分からないのよ」というシャーリングの最後の捨てぜりふにセリーナは激怒して押し黙ってしまうのである。これは、マックスと MI5 の上層部がシャーリングに頼んで行った芝居で、セリーナの政治思想が共産主義に偏っていないことを確認する作業であった。結果的にセリーナはこの後 MI5 上層部の面接を受けて晴れて 'Sweet Tooth' に抜擢されるのであるが、シャーリングが百も承知で親友を裏切る行為に出たことは、彼女にとって不気味な奇妙な二つ目の事件となる。

さて、三つ目の事件はシャーリングとの口論のあと、悶々たる気持ちで寝室の掃除に取りかかっ

ているときに起きる。セリーナはシングルベッドのマットレスに大きな血のシミを発見する。かなり激しい尋問が行われていたのではないかと薄気味悪く感じた彼女は、さらにベッドの足のところに新聞の切れ端を見つける。タイムズ紙の右上部分を三角に切り取ったものでミュンヘン・オリンピックのテレビ欄であることが見て取れ、その切れ端の裏には、鉛筆書きで‘tc’という文字と、最初の文字がかすれて判読しがたい‘umlinge’という文字が書かれてあった。セリーナは、トニー・カニングがクムリングという小島で最後を迎えたことを思い出し、その筆跡が彼のものではないことを知って、もしかしたらトニーがここで尋問を受けたのではないかという考えに取り憑かれる。そう考えると、マックスがあれほどまでに執拗にトニーのことを聞いてくる辻褃が合うのである。では、マックスは何を探ろうとしていたのか。トニーは何故ここで激しい尋問を受けたのか。まるで、ル・カレの『寒い国から帰ってきたスパイ (*The Spy Who Came in from the Cold*, 1963)』を読んでいるかのように、謎が謎を呼ぶスパイ小説に *Sweet Tooth* は様相を呈してくる。実際マキューアンは、*Sweet Tooth* を書く際にル・カレからアドバイスをもらっている。

For the shabby-sinister and sexist atmosphere of the security-service HQ, staffed by cynical and crabby shadow-warriors and keen, clever young women stuck in menial jobs, McEwan did consult a certain David Cornwell — better known as John le Carré. The novelist and ex-spook proved “very generous” with his reminiscences, and helped McEwan to bottle the smoke-and-mirrors aura of secret bureaucracy. “Because you didn’t know what other people around you were doing, you couldn’t tell whether they were complete idiots or unbelievable geniuses. You never knew.”<sup>(4)</sup>

MI5の中では、誰が何をしているのか分からない。彼らが全くのバカなのか、信じられない程の天才なのか、シャーリングやマックスの例を見ても分かるように、マキューアンは *Sweet Tooth* をまず「スパイ小説」に仕立てているのである。

## 2. メタフィクション

この小説は、小説について考える、たとえば小説の書き方を小説の中で論じる「メタフィクション」ともなっている。セリーナはケンブリッジ大学で数学を専攻する前は暇があれば小説を読みふけていた。他の女の子たちとおしゃべりをするくらいなら本を読んでいた方が楽しかったのである。彼女は小説の冒頭で以下の引用のような小説論を展開する。

My needs were simple. I didn’t bother much with themes or felicitous phrases and skipped fine descriptions of weather, landscapes and interiors. I wanted characters I could believe in, and I wanted to be made curious about what was to happen to them. Generally, I preferred people to be falling in and out of love, but I didn’t mind so much if they tried their hand at something else. It was vulgar to want it, but I liked someone say ‘Marry me’ by the end.<sup>(5)</sup>

セリーナが小説に望むことは、テーマでもなく気の利いた言い回しでもなく、素晴らしい自然描写でもない。それは、存在が信じられる登場人物であり、彼らの身に起きる好奇心そそられる出来事

なのである。何をしてもよいけれど、できれば、人々は恋に落ち、恋に破れて欲しい。通俗かもしれないが、小説の最後で誰かが「結婚してください」と言って欲しい。これは *Sweet Tooth* の中でセリーナが言っている小説論であるが、まさにマキューアンは彼女の小説論に従って *Sweet Tooth* を書いていることに読者は気付く。

セリーナのもう一つの小説論は事細かな描写、特に個人の財政状態を細かく描かなければ、その人物の心の内面を描くことはできないという論である。セリーナが MI5 で勤め始め、ロンドンでフラットを借りたときに、このように述べている。

As a clerical officer of the lowest grade my first week's pay after deductions was fourteen pounds thirty pence, in the novel decimal currency, which had not yet lost its unserious, half-baked, fraudulent air. I paid four pounds a week for my room, and an extra pound for electricity. My travel cost just over a pound, leaving me eight pounds for food and all else. I present these details not to complain, but in the spirit of Jane Austen, whose novels I had once raced through at Cambridge. How can one understand the inner life of a character, real or fictional, without knowing the state of her finances?<sup>(6)</sup>

この小説が舞台の 1972 年当時 1 ポンドは日本円に直すと約 800 円であった。セリーナの給料は月額に直すと約 48,000 円、フラットの家賃は約 16,000 円、交通費は約 3,200 円、残った食費にまわせる額は約 26,000 円となる。1972 年当時の日本の事情と比較すると大卒の給料としては高めであるが、ロンドンの物価の高さを考えるとセリーナに「ウェイトレスをしたほうが給料は高い」と言わせる程下級公務員の初任給が安いことが理解できる。週給 14 ポンドが 1972 年当時安いのか高いのか、2012 年に読む年配の読者はある程度理解できるだろうが、当時生まれていない若い読者に対しては今ひとつ説得力に欠ける。マキューアンは 1970 年代当時のイギリスを *Sweet Tooth* で描きたかったと言っている。そのために彼が取った手段は、当時の物価を細かく記述することであった。当時の経済状態に立脚しなければ、現実であれ架空であれ、人の心は描けないと彼は判断したのである。マキューアンは基本的にはリアリズムにしっかり根を下ろした作家である。オースティンが理想の結婚相手を選ばなければならないエリザベスの心をあれほどリアルに説得力を持って描けたのもビングリーやダーシーの高額な年俸、そしてベネット氏のそれよりもはるかに劣る経済状態をつぶさに小説の中で描いていたからなのである。

「メタフィクション」のもう一つの例は小説の中に小説が登場することである。トム・ヘイリーが書いた小説を我々読者は *Sweet Tooth* の中で読むことになる。そもそも 'Sweet Tooth' というのは「甘いもの好き、甘党」の意味で、暗殺や破壊工作といったいわゆるハードボイルド的な硬派のスパイ活動ではなく、ソフトな芸術・文化面でのスパイ活動を指す。イギリスで出版された文芸誌『エンカウンター』(*Encounter*) はアメリカ CIA から資金援助を受けていたことは有名である。さらにジョージ・オーウェル (George Orwell) の *Animal Farm* (1945)、および *Nineteen Eighty-Four* (1949) は内容に関する指示はなかったが、本の売り上げを伸ばす援助を MI5 が行っていたことが小説の中で指摘されている。このように 'Sweet Tooth' は若い小説家をターゲットにして共産主義・社会主義文化を批判するような内容の小説を書かせる MI5 のスパイ活動なのである。

*Sweet Tooth* の中ではトム・ヘイリーが書いた 4 つの短編が登場する。'This is Love' は労働党

(231)

の国会議員で無神論者の男が、双子の弟の代わりに素晴らしい説教をして、その場にいた熱心な女性信者に付き纏われて、真のキリスト教に目覚める話である。この短編を読んだセリーナはトムが‘Sweet Tooth’には最適な作家であると確信する。二つ目の短編はマキューアン自身が *In Between Sheets* (1983) に収録したマネキン人形に恋する男を扱った ‘Dead As They Come’ である。セリーナはこの作品を読んで、主人公と同じように現実の把握が困難 (‘loose grip on reality’) になる。三つ目の短編は数学の確率を題材にした ‘Probable Adultery’ で、不倫を犯している妻がホテルの三つの部屋のどこにいるのかを当てる内容になっている。四つ目の作品 *From the Somerset Levels* は小説で、トム・ヘイリーはこれによって「オースティン賞」を受賞し一躍作家として脚光を浴びることになる。しかし、内容が資本主義社会の矛盾で引き起こされた核戦争によって、父と娘が荒廃したロンドンでペストに罹り、互いの腕の中で死んでいくというものだったために、これが原因でセリーナはMI5を解雇されることになる。このように *Sweet Tooth* は、小説について考える、また小説の中に小説が登場する「メタフィクション」にもなっている。

### 3. 自伝的小説

マキューアンをある程度知っている読者なら、この小説は自伝的傾向が強いことが理解できる。それが分かると数倍 *Sweet Tooth* が楽しめるのである。まず、セリーナは高校生時代に文学に夢中になったが、数学が将来役に立つのではないかとケンブリッジ大学では数学を専攻した。マキューアンは大学進学を控えて文学の道か、あるいは科学の道に進もうか真剣に迷ったそうである。ただ数学の成績が今一つ伸びず、文学の道を選んだそうである。ケンブリッジ大学を受験したが、*Macbeth* を読んでいなかったために失敗したと本人は語っている。結果的に、マキューアンはサセックス大学に進学しているが、トム・ヘイリーはこの大学で教鞭をとっている。そうすると、「背が高くてやせている」の容姿から彼がマキューアンに思えてくるのである。実際彼はこの大学で作家になろうと志している。セリーナが自分のフラットに帰ってきたときに本の枝折が椅子の上に置かれていた。そのとき彼女が読んでいた本はマルカム・ブラッドベリの *Eating People is Wrong* (1959) である。彼はイースト・アングリア大学で小説の書き方をマキューアンに教えていたのである。

さらにマキューアンは作家としてデビューした当初知り合った作家のマーティン・エイミス、批評家で良き助言者のイアン・ハミルトン、出版者のトム・マシュラーを小説に登場させている。エイミスはケンブリッジ大学でトムと一緒に小説の朗読をし、ハミルトンはセリーナとトムと共にロンドンのパブで会っている。それぞれ興味深い「カメオ出演」であるが、なかでも傑作なのはトム・マシュラーである。

We were shown into Tom Maschler’s grand office or library on the first floor of a Georgian mansion overlooking the square. When the publisher came in, almost at a run, I was the one who handed over the novel. He tossed it on the desk behind him, kissed me wetly on both cheeks and pumped Tom’s hand, congratulated him, guided him towards a chair and began to interrogate him, barely waiting for an answer to one question before starting the next. What was he living on, when we were getting married, had he read Russel Hoban, did he realize that the elusive Pynchon had sat in that same chair the day before, did he know Martin, son of Kingsley, would we like to meet Madhur



Jaffrey?<sup>(7)</sup>

「小走りにやって来た」、「受け取った原稿を後ろに放り投げた」、「まるでポンプを上下するように握手した」、最後には「質問に対する答えを待たないで、また次の質問をする」というような、落ち着かない、せっかちな性格は出版者マシュラーを実際知らない読者にも滑稽ではあるがある暖かみを持って伝わってくる。彼のカメオ出演は別れた後でもセリーナとトムを目をくらくら（'a little dazed'）させてしまう。ある批評家は、この自伝的要素を次のように言っている。

The young writer's name is Tom Haley, but it might as well be Ian McEwan. Haley's debut as a writer now takes centre-stage in the novel, with Serena chronicling his literary tastes and habits, his reactions to his own growing success, his early encounters with Martin Amis, Ian Hamilton, Tom Maschler, and so on. McEwan seems to be enjoying the trip down memory lane, sketching his old pals and their hangouts with nostalgic affection. It's all fairly good fun.<sup>(8)</sup>

マキューアンが「ノスタルジックな愛着」で古き友人たちや、彼らの溜まり場のことを楽しんで書いていることは読者にも伝わってくるし、彼の履歴を少しでも知る人ならば *Sweet Tooth* は読んでいて面白い「自伝的小説」なのである。

#### 4. 歴史・政治小説

セリーナとマックスが彼らのターゲットであるトム・ヘイリーについて話しているとき、マックスは、トニーの行った島の名前を彼女に尋ねたときと同じように、突然次のような質問をする。

He closed the file. 'The thing is this. Remember Oleg Lyalin?'

'You mentioned him.'

'I shouldn't know any of this. And you certainly shouldn't. But it's gossip. It's going the rounds. I think you might as well know. He was a great coup for us. He wanted to come across in 'seventy-one but apparently we kept him in place here in London for few extra months. Five was about to arrange his defection when he was picked up by Westminster police for drunk driving. We got to him before the Russians did — they would have certainly killed him. He came across to us with his secretary, his lover. He was a KGB officer connected to their sabotage department. Pretty low-level guy, something of a thug apparently, but priceless. He confirmed our worst nightmare, that there were dozens, scores of Soviet intelligence officers working here under diplomatic immunity.'<sup>(9)</sup>

オレグ・リアリンはソ連の元スパイで、彼の KGB からの亡命によって 105 人のソ連の外交官がスパイ容疑で 1971 年 9 月 25 日にイギリスから追放されている。彼が酒酔い運転で警察に逮捕されたのも、MI 5 が彼に隠れ家を提供したのも、彼が愛人との新しい生活と引き換えに KGB の活動の情報を提供したのも歴史的事実である。

このように *Sweet Tooth* では実際の歴史的人物、実際の歴史的事件が取り扱われる例が多く、「歴史小説」としての色彩も強い。マキューアン自身が出ていることだか、彼は *On Chesil Beach* で 1960 年代のイギリスを描いたので今回は 1970 年代のイギリスを描きたかったそうである。確かに彼は小説の中で、当時のいろいろなものの値段、流行していた曲や当時の若者たちの服装や髪型、あるいは街を歩いた時の雰囲気などを克明に描いて、当時青春時代を送った人々が忘れかけていたノスタルジアを感じさせてくれる。さらにマキューアンは 1970 年代初頭を特徴付ける炭坑労働者たちのストライキや組合運動、北アイルランドにおける過激派 IRA のテロ活動、そしてアメリカとソ連との西側諸国と東側諸国を巻き込んだ緊迫した冷戦が生み出す暗い雰囲気を描いてオーウェルが描いた *1984* を彷彿とさせる「政治小説」にも *Sweet Tooth* を仕上げている。

歴史小説の中に架空の人物が出てくることがよくある。歴史的人物の中にあって信憑性が高まるので歴史小説家を用いる常套手段である。マックスによると、確かな情報ではないが 1940 年代終わりから 1950 年代終わりにかけてボルト (Volt) というコードネームのイギリス人スパイが MI5 のために活動していたらしい。ところが前述したオレグ・リアリンがまだモスクワにいるときに、この「ボルトに関する資料」を彼が見たというのである。その資料は水素爆弾に関するもので、開発に関わる科学的なものではまだなく、もし水素爆弾を中国が持ったとしたら、あるいは先制攻撃するとすればどれくらいの費用がかかるのか、また兵器を貯蔵するとすればどれくらいの量が適当なのかという推測の域をでない資料であった。しかし、この資料がソ連の手に渡ったために、結果的にソ連は水素爆弾の開発を急ぐようになり、アメリカと同じようにその兵器を保持するようになったのである。マックスはこのボルトが実はトニー・カニングで 20 数年前から MI5 の情報をソ連のエージェントに流していたらしいという可能性をセリーナに仄めかす。マックスの告げた情報をにわかに信じられない彼女は驚きで返す言葉がなかった。ただ、トニーと別荘で過ごしたあの短い夏の出来事が思い出されるのである。トニーはもし日本が原子爆弾を当時持っていたとしたら広島悲劇は起こらなかったであろうと言っていた。「抑止力」の話である。トニーは「たとえ非難が激しくても、ソ連に水素爆弾を軍備させよう。心の小さな人間には私を非愛国的な裏切り者と呼ばせよう。理性のある人間は世界平和と文明存続のために活動するのだから」と言っていたのをセリーナはこのときになって思い出すのである。

マックスの部屋を出て一人になった彼女は、新たにトニーを思って涙を流す。先回は彼に捨てられた悔しさによる涙であったが、今回は彼に裏切られた怒りによる涙であった。やはり、トニーが取った行動はどうひいき目に見ても国民や国に対する裏切り行為であった。

## 5. 恋愛小説

*Sweet Tooth* はスパイ小説、メタフィクション、自伝的小説、そして歴史・政治小説の面を持っていたが、さらに「恋愛小説」という色合いも濃いのである。この小説の最後が二人の恋人からの手紙で終わっているのが最大の理由である。トニーとの愛が救われない愛とすれば、トムとの愛は救われる愛なのである。小説を読み返してみるとトニーとの愛が一本の糸として途切れずに小説の最初から最後まで通っているのが分かる。

トニーがバルト海の小島で亡くなったという知らせをジェレミーから聞いた時、セリーナは地下鉄の中であたりの乗客に構わず涙を流した。これは、どうしてそう言ってくれなかったのという悔し涙であった。そのトニーが実は二重スパイで水素爆弾の情報をソ連に流していたとマックスから聞いたときに彼女が流した涙は、反逆者に対する怒りの涙であった。ところが、'Sweet Tooth'

の任務についてトムとの新しい恋が芽生え始めるとその悔しさも怒りもいくらか薄らいできた。彼女にとってトニーとの愛はもう過去の出来事になっていたのであった。セリーナはマックスが止めるのにも関わらず、トムが書いた小説 *From the Somerset Levels* が出版されるのを手伝う。批評家も出版者もトムの作品を評価していたからであった。ところが、「オースティン賞」を受賞した後、『ガーディアン』に「オースティン賞受賞作家 MI5 から賄賂」というスプーク記事が載る。セリーナは MI5 の幹部に呼び出され、事情をただされたあと解雇の通告を受ける。部屋を出るときに、一年半前にトニーが書いた手紙が彼女に手渡される。トニーがセリーナに国家機密に関する重要な情報を漏らしてはいなかったと既に判断したからであり、最大の理由はその手紙の中に暗号が埋め込まれてはいないと確信したからである。トニーがセリーナに当てた手紙は以下のようなものである。

September 28th, 1972

My dear girl,

I learned today that you were accepted last week. Congratulations. I'm thrilled for you. The work will give you much fulfillment and pleasure and I know you'll be good at it.

Nutting has promised to put this note in your hands, but knowing how these things work, I suspect that some time will pass before they do. By then, you will have heard the worst. You'll know why I had to go, why I had to be alone, and why I had to do everything in my power to push you away. I've done nothing so vile in my life as drive off, leaving you in that lay-by. But if I'd told you the truth, I would never have been able to dissuade you from following me to Kumlinge. You're a spirited girl. You wouldn't have taken no for an answer. How I would have hated it, you watching me slide down. You would have been sucked into such a pit of sorrow. This illness is relentless. You're too young for it. I'm not being a noble and selfless martyr. I'm dead certain I can do this better alone.<sup>(10)</sup>

暗号解読者たちが、目を皿のようにして何か暗号が埋め込まれていないかと躍起になって探したが、この文面である。何か埋め込まれているとすれば、それは一人の男が一人の女性に綴った愛情なのである。とくにトニーが真実を話した場合、必ずセリーナがクムリングまで追いかけてくると予測するくぐりは、彼がセリーナの深い愛情を理解していることを示している。反対に、絹のブラウスの一件で嘘をついてまでセリーナをひとり駐車場に残して走り去ったのは、トニーの彼女への深い愛情を示している。この手紙を読んだ読者の中で、マキューアンは実はこの手紙を小説の中で一番書きたかったのではないかと感じた人も多かったと思う。この手紙を読んだあと、セリーナは MI5 の建物の廊下であたりはばかりず大声をあげて泣くのである。「誰も信じてはいけない」というスパイの鉄則をトニーから教わった彼女ではあるが、それを破ったから自分は傷ついたと長い間思っていた。ところが、トニーは彼女を裏切ってはいなかったのである。

スパイでありながら、セリーナが信じたもう一人の男はトム・ヘイリーである。'Sweet Tooth' のために彼女はトムを形としては最初から最後まで騙していたわけだが、マックスが作戦を中止してトムの作品を出版しないようセリーナに命じたとき、彼女はトムの小説家としての将来を考えて出版の手助けをする。セリーナが任務を捨てて一人の女性としてトムを愛し始めた時、皮肉なこと

にトムが今度は「スパイ」になってセリーナを騙すことになるのである。‘Sweet Tooth’ 作戦が瓦解したあと、姿をくらましたトムから彼女に次のような手紙が届く。

Tonight I'll be on a plane to Paris to stay with an old school friend who says he can give me a room for a few days. When things quietened down, when I've faded from the head-lines, I'll come straight back. If your answer is a fatal no, well, I've made no carbon, this is the only copy and you can throw it to the flames. If you still love me and your answer is yes, then our collaboration begins and this letter, with your consent, will be Sweet Tooth's final chapter.

Dearest Serena, it's up to you.<sup>(11)</sup>

これはトムからの「結婚してください」という内容の手紙であり、セリーナがもし「はい」と答えれば、彼が何十年後かに書く小説 *Sweet Tooth* の最終章となるものであった。

## おわりに

果たして、*Sweet Tooth* は「スパイ小説」、「メタフィクション」、「自伝的小説」、「歴史・政治小説」、「恋愛小説」のどれなのであろうか。マキューアンはどれに重きを置いて書いたのであろうか。小説の形態をある程度すべて網羅していることを考えると、あのいたずら好きのマキューアンであるから我々読者は裏をかかれまいよう発想の転換をしなくてはいけない。つまり、逆にマキューアンが読者に小説に何を求めるのか聞いているのではないかということ。いみじくもある批評家は次のように述べている。

Because this isn't really a novel about MI 5 or the cold war or even — despite the rather obviously ladled-on research about Heath and Wilson and miner's strikes and the IRA — the 70s. This is a novel about writers and writing, about love and trust. But more than that — and perhaps most incisively of all — it's a novel about reading and readers. It's about our own peculiar responses to fiction, to the strange, slippery magic of narrative. It's about how all any of us ever really want from fiction is “my own world, and myself in it, given back to me in artful shapes and accessible form”.<sup>(12)</sup>

小説は現在行き詰まりの状態である。テーマにおいても手法においても新しさを見いだせず、小説家は手探りの状態にある。文学自体が危機に瀕していると言っても過言ではない。こうした時代に、本の売り上げを伸ばしたいなら批評家たちの意見を尊重しなければいけない。必然的に小説家は批評家を満足させるような小説を書くようになる。しかし、小説は読者が読むためのものであって、批評家が読むためのものではない。マキューアンは原点に帰って、読者自身の世界を小説に投影させたかったのである。だから、求めるすべてのものが *Sweet Tooth* に用意されていたのである。もう一人の批評家は、このようにマキューアンが常に感じていた批評家へのストレスを次のように述べている。

In *Sweet Tooth*, McEwan explores these questions by incorporating theoretical debates

about his own work. Serena admires Haley's work, but when it departs from social documentary she feels betrayed. She recognizes that she is "the basest of readers. All I wanted was my own world, and myself in it, given back to me in artful shapes and accessible form". McEwan must be frustrated that critics often praise and then cut him down for precisely his ability to make accessible the thing that literary fiction does best.<sup>(13)</sup>

セリーナは自分のことを「一番低俗な読者」と呼んでいる。彼女が望んでいるのは彼女が存在する彼女自身の世界であり、芸術的なそして近づくことが可能な形をして自分に還元できる世界なのである。いわゆる自分が投影できる架空の世界である。果たして彼女は本当に一番低俗な読者なのだろうか。芸術のための芸術、小説のための小説とは一体なんなのだろうか。小説を楽しく読んで、それなりに己の人生を豊かにしていくことのどこがいけないのだろうか。マキューアンは楽しく読める作家であり、その意図が分かりやすい作家と言われて続けて来た。ある批評家たちが、それを文学的価値がないと言って切って捨て、意図の分かりにくい小説を芸術的価値があると論評するのは如何なものだろうか。

#### 注

- (1) *Sweet Tooth*, pp. 21-2.
- (2) *Ibd.*, p. 33.
- (3) *Ibd.*, p. 68.
- (4) 'Ian McEwan: Why I'm revisiting the Seventies'.
- (5) *Sweet Tooth*, p. 6.
- (6) *Ibd.*, p. 42.
- (7) *Ibd.*, p. 224.
- (8) '*Sweet Tooth* by Ian McEwan — review'.
- (9) *Sweet Tooth*, p. 166.
- (10) *Ibd.*, pp. 290-1.
- (11) *Ibd.*, p. 320.
- (12) '*Sweet Tooth* by Ian McEwan'.
- (13) 'With *Sweet Tooth*, McEwan is at the top of his form'.

#### 参考文献

- Lasdun, James. '*Sweet Tooth* by Ian McEwan — review', *The Guardian*, August 23, 2012.
- McEwan, Ian. *Sweet Tooth*, Jonathan Cape, 2012.
- Myerson, Julie. '*Sweet Tooth* by Ian McEwan', *The Observer*, Sunday 2 September 2012.
- Sutcliffe, J. C. 'With *Sweet Tooth*, McEwan is at the top of his form', *The Global and Mail*, Friday 31 August 2012.
- Tonkin, Boyd. 'Ian McEwan: Why I'm revisiting the Seventies', *The Independent*, Wednesday 12 September 2012.